B 6

小学生の人間関係 ——家庭・地域における生活行動実態より——

香川大教育　○時岡　晴美　　上玉　啓子

目的　ファミコンブーム、オタッカーの出現など、人とコミュニケートしない子どもが増加しているといわれるが、子どもの日常生活はどのような集団の中で展開されているのだろうか。本報告では、小学生に着目して生活行動の実態を明らかにし、家族、友だち、近隣などとの関わりから、小学生の人間関係について考察する。

方法　愛媛県I市立H小学校（男子 151名、女子 132名、計 283名）の全児童を対象として、1989年10月31日、集合調査法を用いて、クラス毎に教師による説明を加えながら、調査前日における主な行動の時間、場所、内容、人についてのアンケート調査を実施した。

結果　家族全員で食事をしたのは、朝食で2割、夕食で5割、朝夕ともは2割に満たない。性別では男子が、学年別では高学年ほど家族が揃わなくなっており、6年生では14%が朝夕食とも「ひとり」か「きょうだい」だけであった。その他の生活行動では、母親と一緒に行なった行動は8割の人にみられるが、父親、祖父母とはさほど多くなく、性別では男子が、学年別では高学年ほど少なく（「父親と」では1年生65%、4年生38%、6年生25%）、家族との直接的な関わりが減少する傾向がみられる。戸外遊びでは同クラスの人、戸内遊びではきょうだい、同クラスの人が多く、同質性の高い単純な人間集団を形成している。集団の大きさは戸内遊びの方が小さく、「2人」が最も多い。また、午後4～5時台に、高学年になるほど友だちからの孤立がみられ、しかも、5年生で2割、6年生で5割が何かの行動をしたと自覚していない。近隣関係についても、高学年になるほど関わりを持たなくなる傾向がみられた。